

年報

— 平成 10 年度 —

1999

大磯町郷土資料館

— 目 次 —

〔事業報告〕

庶務 …………… 4

- ・ 組織および職員
- ・ 運営委員会
- ・ 予算
- ・ 維持管理
- ・ 入館者

学芸 …………… 6

- ・ 企画展
- ・ 学級・講座
- ・ 刊行物
- ・ 調査・研究・普及
- ・ 博物館実習
- ・ 博物館資料の収集と利用

〔研究報告〕

国府祭について …………… 18

摘み草の会 ……

後藤ひろ子 中村 ふじ 熊沢 聖子
滝沢すみ子 渡辺 信子 滝口美代子
北村 和江 鵜飼レイ子 望月 定子

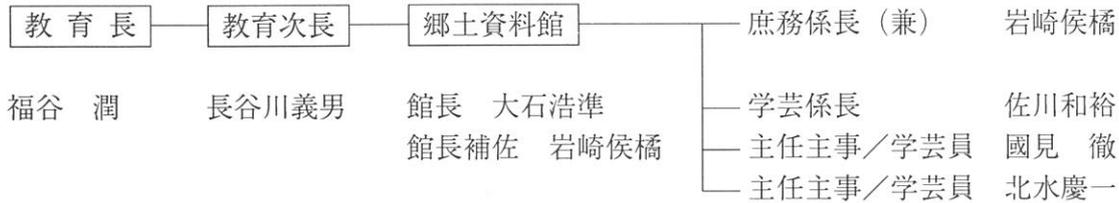
二宮町山西の民俗 (2)

佐川和裕 …… 27

事業報告

庶 務

■組織および職員



■運営委員会

<委員の構成>

- ・石井四郎 区長会連絡協議会
- ・稲葉和也 文化財専門委員
- ・福井靖史 学校長
- ・廣瀬利郎 社会教育委員
- ・石田和夫 学識経験者

<委員会の開催>

- ・平成10年9月4日 平成9年度事業報告、平成10年度事業について
- ・平成11年2月26日 平成10年度事業の進捗状況、平成11年度事業計画について

■予算

<当初予算の推移>

単位：円

年度	平成6年度	平成7年度	平成8年度	平成9年度	平成10年度
金額	76,955,000	77,930,000	63,697,000	62,526,000	57,439,000

<平成10年度決算>

単位：円

事業	運営事務	維持管理	学芸活動	特別展	企画展	教育普及	計
金額	5,611,771	15,460,485	2,260,633	—	662,211	86,987	24,082,147

□職員給与 (33,762,196) □委員等報酬 (51,100) □歳出合計 (57,895,443)

■維持管理

<委託業務>

- ・総合清掃委託／(株)フジワールド
- ・敷地管理委託／(財)神奈川県公園協会
- ・警備委託／(株)全日警横浜支社
- ・自家用電気工作物保守点検委託／小島電気管理事務所

- ・消防用設備保守点検委託／(有)湘南消防器具商会
- ・自動ドア保守点検委託／(株)ナブコ
- ・昇降機保守点検委託／ダイコー(株)横浜営業所
- ・空調設備保守点検委託／高砂熱学工業(株)横浜支店
- ・浄化槽保守点検委託／湘南興業(有)
- ・燻蒸業務委託／関東港業(株)横浜営業所
- ・動物剥製作成委託／(有)尼ヶ崎科学標本社
- ・祭船解体組立（展示）委託／大磯御船祭保存会
- ・絵画パネル貼り委託／藤和額装(株)

<施設の修繕>

- ・モニターテレビ、レーザーディスク修理／湘南家電
- ・展示室防護板取付け／杉山アート
- ・電話障害修理／東陽工業(株)神奈川支店
- ・浄化槽ブローアー整備他／高砂熱学工業(株)横浜支店

■入館者

<入館者の推移>

単位：人、日

	平成6年度	平成7年度	平成8年度	平成9年度	平成10年度	累計(昭和63年～)
入館者数	37,565	35,014	31,218	28,857	28,415	385,103
1日平均／開館日数	130／289	121／290	111／281	103／278	100／282	128／2,989

<月別入館者数>

単位：人

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
入館者数	2,533	2,678	1,779	1,164	1,649	1,863	4,098	4,273	1,176	1,539	2,676	2,537	28,415
1日平均	105	107	77	67	65	81	163	185	53	69	121	105	100

<見学・視察>

館対応のみ、単位：団体

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
件数	1	1	2	0	1	2	4	1	2	0	1	1	16

<研修室の利用>

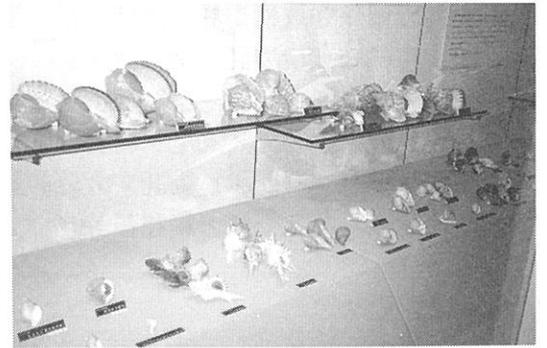
単位：団体

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
件数	16	16	15	19	5	17	22	13	8	9	13	17	170

学 芸

■企画展

「相模湾の貝類Ⅰ—大磯海域にすむマキガイ—」
期 間 平成10年7月12日（日）～9月6日（日）
開場日数 46日間
会 場 企画展示室
出品点数 約1,000点
料 金 無料
入場者数 3,102人



（趣 旨） 大磯町では、現在町史編さん事業が進められている。大磯の歴史、民俗、自然について調査が展開されているが、自然については平成8年3月まで調査、執筆が行われ、その集大成として「大磯町史9別編 自然」が発行された。調査の際、集められた実物資料、写真資料の一部は当館に移管された。貝類については海産、淡水産、陸産のものが一通り移管され、全体の種類数は、520種を越えるものであった。これらの資料は、町内での貝類相を紹介するのに適した資料で、企画展で取り上げることは、日ごろあまり気にかけない海産生物に目を向けてもらうことにつながると考え企画を進めることにした。

（内 容） 展示資料の量的な問題から海産のマキガイにしぼり展示を行った。メインとなる展示は町史編さん事業で収集された資料を活用し「大磯海域にすむマキガイ」を構成。「近海のマキガイ」、「磯、浜のマキガイ」に分けて展示を行った。寄贈資料を活用しての国内外の珍しいマキガイ、当館資料や町史編さん事業での収集資料を活用しての大磯産マキガイの化石（大磯層、二宮層）も合わせて展示した。

当館の企画展示室は主だった部分がガラスケースとなっており、側面から資料を見るようになっている。見学者の位置から資料までの距離が一番短いところでも30cmと離れており、マキガイの5mm～10mm程度のもものでは資料が小さすぎて見づらい。このことを考慮して貝の全体像を捉えづらいものについては拡大写真を合わせて展示した。また、キャプションも他の展示より小さいものを活用し、キャプションが目立ち過ぎず、実際の資料が引き立つように工夫をした。資料点数は1,000点以上ありながら、個々が小さいものであるため、展示全体としてはあまり見栄えがしないように感じたが、1点1点資料の配置に気を遣い、先の述べたような工夫をしたこともあって、種の特徴を捉えやすい展示ができたのではないかと考えている。

（担 当） 北水慶一

「日本列島エハガキ紀行」

期 間 平成10年10月18日（日）～12月6日（日）
開場日数 40日間
会 場 企画展示室
出品点数 約2,500点
料 金 無料
入場者数 6,160人



（趣 旨） 当館では、かねてから絵はがきの収集に力を入れてきた。多くの方々から寄贈を受け、あるいは購入した絵はがきは多種多様で、その数は5,000点余りに及んでいる。明治後期から盛んに刊行されはじめた絵はがきは、当時の景観だけでなく、人々の生活や表情に至るまで鮮明に映し出していることから、絵はがきを「時代を読む資料」として位置付けてきたことが収集の理由である。もちろん、大磯が海水浴場や避暑避寒の地として多くの人々から支持をうけたことを受けて、実に多くの絵はがきが発行されたという地域性もその背景にある。今回の展示は所蔵絵はがきの公開を念頭におきながら、近世以降における庶民の旅の

中で、手頃な土産品として、あるいは情報源としての役割を負ってきたという一面を捉えて集成した。あわせて、展示を通して観覧者それぞれのノスタルジーを呼び起こし、更には「旅 — 非日常 —」の空間を思い描いていただくことを目指した。

(内 容) 神社仏閣に参詣することを主目的にした近世における庶民の旅から、さまざまな目的や方法、更には価値観を生み出した近年までの旅を、それぞれの時代におけるシンボリックな資料とともに構成した。中央正面の展示台には近世の寺社参詣の証しとなった守札、寺社縁起や名所案内などの刷物を配し、特に大磯町内の旧家から見つかった大量の守札(238点)を半ば無造作に積み重ねることによって数の多さを誇示し、強い印象によって展示テーマへの速やかな導入を狙った。また、近世以来の名所案内や地図などの刊行物を随所に配して旅のイメージを助長させ、時代を感じさせるコピーが満載された旅館パンフレット、あるいは昭和40年代を中心に人気を博したペナントやキーホルダー(あるいはその前身としての根付)なども旅の象徴的な事物として展示した。なお、展示室全体には、メインテーマである明治後期から昭和40年代までの絵はがきを、北海道から九州に至るまで地域ごとに集成した。これは、絵はがきそのものが展示物としては小さくて見づらいというハンディキャップが避けられないため、黒いラシャ紙を台紙として1枚1枚ビニールに梱包した絵はがきを貼り付け、ガラスケースのない壁面に思いきって露出展示するなどの方策をとった。その数は2,000枚にのぼり、展示室に入るとその数に圧倒される。一種独特な異空間を思わせることによって、旅という非日常空間の移行を試みた。演出による展示効果はある程度達成できたのではないかとと思われる。

(担 当) 佐川和裕

「地中からの足音Ⅱ—近年の発掘調査の成果—」

期 間 平成11年3月7日(日)～4月11日(日)

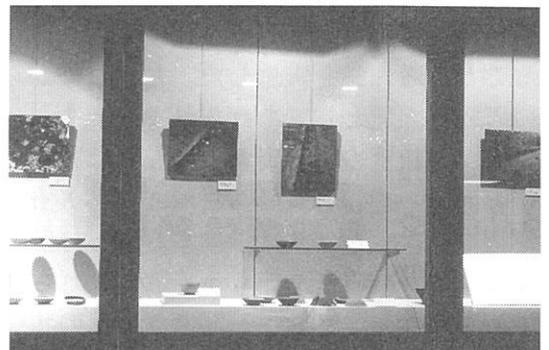
開場日数 29日間

会 場 企画展示室

資料点数 約100点

料 金 無料

入場者数 2,758人



(趣 旨) 大磯町域には旧石器(先土器)時代から近現代迄数多くの遺跡が存在し、発掘調査は現在迄百数十箇所に及ぶ地点で行われているが、発掘調査件数の内、8割以上は最近10年位の間に行われている。膨大な調査資料に就いては、整理調査途中の遺跡も多く、一般に公開する機会はずしも多いとは言えないのが現状である。今回の企画展では、大磯町内において近年発掘調査が行われ、現在整理調査途中の遺跡に関して、視覚的に捉える事を主眼とした。展示は、遺構等発掘調査資料の写真パネルとともに、特筆すべき資料であり且つ展示可能な遺物によって構成し、調査成果の速報を行うとともに、資料実見の場を設定することを本旨とした。

(内 容) 丹沢山塊から南東に向かって半島状に斗出する起伏の小さい丘陵は大磯丘陵と呼ばれ、南面する海に向かって樹枝状に分岐する。大磯町域は、大磯丘陵南端の一部と海浜部に挟まれ沖積世に形成された平地を包括した位置に存在する。今回展示対象とした遺跡は大磯町域に所在する7地点である。遺跡の立地は、台地の丘陵部から海浜部まで、また、河岸段丘上等多岐にわたっている。遺跡の性格も集落址、墳墓、祭祀遺構、別荘跡等様々である。展示資料の時期については7時期に大別出来る。すなわち縄文時代後期、弥生時代中期、古墳時代前期、古墳時代後期、平安時代、中・近世、近代である。

主な資料について概観してみたい。縄文時代後期の資料としては、町屋遺跡出土の堀之内期の土偶が挙げられる。弥生時代中期の資料は馬場台遺跡28地点における宮ノ台期の被火災住居址の一括資料が存在する。当該資料は僅かな調査面積の調査であったが、推定規模長軸8m程の住居址が検出され、炭化した住居構築材と共に土器・石器・骨角器等大量の一括資料が存在した。大磯町域では初の宮ノ台期の一括資料であり、相模湾沿岸の当該時期の資料としても特筆されよう。古墳時代後期は横穴墓であり、坂田山南横穴墓群の資

料を掲げた。本横穴墓群は潤沢な遺物を擁し、馬具等の金属製品と共に良好な須恵器の一括資料がみられる。金属製品は未だ展示可能では無い為、遺物群の中から須恵器を展示に供した。かつて別荘地であった町屋遺跡からは、近代の遺物が多く検出されている。洋館建築に使用されていた赤煉瓦・耐火煉瓦や海水浴場の保養施設であった「禰龍館」銘を持つ磁器資料等を展示資料として選定した。他に古墳時代前期の集落址である坊地遺跡（J地点）の土器資料、馬場台遺跡（34地点）の平安時代の住居址内土器一括資料、従前から広く所在が知られる十三塚、関東大震災以前に構築されたという屋敷地の赤煉瓦塀の一部等の資料を展示に供した。

展示に際しては、導線に沿って古い時期から新しい時期へと展開するように資料を配した。すなわち遺跡ごとに纏めず、複合遺跡の場合は同一遺跡の資料が分散することとなる。又、資料を視覚的に捉えるという趣旨に沿い、基本的に詳細な文字解説は行っていない。現物資料に関しては器種名・遺跡名・時期の表記を原則とし、必要と考えられる場合には文字解説を附した。基本的な展示構成は現物資料の背後に遺構等発掘調査時の写真を配してある。解説文・図・写真等は無論パネル化しているが、写真に関しては、視覚的効果や今後の活用を鑑み、木製パネルを使用した。照明については、可能な限り周囲を暗くし、局所照明によって展示資料を引き立たせる効果を図った。

特記事項としては十三塚に関しては遺物が僅少であることと遺構形態への理解を得る為に遺構平・断面図を掲げた。弥生時代後期の被火災住居址の炭化材については、一般的にも展示される例が少ないことから展示を試みた。形状が良好に残存している資料を選定した。炭化材資料は脆弱であり、展示作業中の破損の危険が有った為、合成樹脂溶液を含浸することによって強化を図った。炭化材を分析試料としてみた場合、樹脂含浸作業は逡巡せざるを得ないが、炭化材資料群の樹種同定・炭素年代測定等の分析作業を既に行っていることから作業を実施した。しかしながら必ずしも十分な強度が得られたとは言えない面もあるため、今後の研究が課題としてあげられよう。

又、別荘地の猪瓦資料に関しては、近年迄建造物が存在していたため、過去に撮影した洋館建築の写真及び解体時の記録写真等も併せてパネル化して掲げた。当然の事であるが、近・現代の考古資料を扱う場合、地上に存在する、又は伝世する資料に触れる機会の必要性が増大すると言えよう。また発掘調査以外の採集等による資料収集形態も多く取り入れられる。煉瓦資料の展示においても一個体ごとの資料の他、使用形態を示すため、構築物の一部である塊の状態の資料をも配した。

前記したように、今回の展示で扱った遺跡は整理調査途中である為に、展示可能な資料の選定が多くの制限を受けざるを得ない。今回取り扱った遺跡に関しても、整理調査終了の後に改めて展示を行う必要性が出てくるものと考えられる。

(担当) 國見 徹

■学級・講座

<自然観察会>

「海岸で貝を拾おう」

日 時 平成10年7月26日(日)

会 場 照ヶ崎周辺

講 師 福田良昭氏(相模貝類同好会)

参加者 19人



(内容) 企画展「相模湾の貝類 大磯海域にすむマキガイ」に合わせ、海産貝類をテーマにした観察会を行った。日程については、7月から8月までの干潮の時間を考慮して決めた。

観察会当日は晴天。7月下旬ということもあり、浜辺を歩くには少々厳しい状況であった。町内の北浜海岸から照ヶ崎までを歩いた。その間には、浜、港、磯があり、それぞれの場所に合った貝を観察することができた。浜では打ち上がった貝を採集し、その後で解説を行った。近年、打ち上がった貝をみると二枚貝のサトウガイ、ムラサキガイ、マガキ、バカガイ、ワスレガイ、巻貝のツメタガイ、ダンベイキサゴの7種

類が目立ち、他の種類と出会うことが少ないが、当日は幸運にもレイシガイやイボニシ、マルタニシ、インドヒラマキなど計18種類を観察することができた。

大磯港では、飛沫帯で生息するタマキビガイ、ウノアシガイ、ヨメガカサガイがよく観察された。照ヶ崎に移り、磯の生き物の観察では、潮間帯に生息するイボニシ、レイシガイのほか貝類以外ではフジツボ、ヒトデ、イソカイメンなどが観察できた。

親子参加型で企画を進めたが、夏休みの自由研究にと浜辺で熱心に貝を集めている姿が印象的に残る観察会であった。

(担 当) 北水慶一



<子ども歴史教室>

「さわってみよう！昔の道具」

日 時 平成10年8月5日(水)

会 場 江戸民具街道

講 師 江戸民具街道館長 秋澤達雄氏

参加者 22人

(内 容) 中井町にある“おもしろ体験博物館”江戸民具街道を訪ねた。江戸時代の道具を見学し、あるいは実際に使用して、人々の暮らしとさまざまな知恵を発見することを目的とした。

まず、屋外で消防ポンプによる水の放水を体験した後、館内を見学した。その後、近世以降の燈火具の歴史について講義を聞き、実際に燈火具の使用を試みた。行灯や燭台などさまざまな燈火具を実見し、更に手燭やガンドウなどのように移動・携行するために工夫された道具の仕組みを探った。最後に、油を入れた灯明皿に灯心を置いて実際に火をつけてみた。電灯が当たり前になっている子どもたちにとって、実際の火による燈火は思わぬ感動を呼び起こした。そして、平たい皿と植物性の油、荷造り用(麻や木綿)の紐さえあれば、キャンプや災害などの緊急時にも役立つことを体得した。

(担 当) 佐川和裕、國見 徹



<郷土史講座>

「民俗学講座」

日 時 平成10年11月22日(日)

会 場 研修室

講 師 和田正洲氏(相模民俗学会会長)、
山崎祐子氏(東洋大学短期大学講師)

参加者 21人

(内 容) 多くの方々に民俗学のおもしろさを知っていただくことを目的として開催した。内容は和田氏による「民俗とことば」、山崎氏による「食の民俗学—納豆・鮭・茶—」という2つのテーマで構成した。まず、山崎氏が滋賀県高島町の鮭鮓やタイ族のナレズシ、中国貴州省の納豆などを事例として、豊富な民俗調査を基調としながら塩を使用せずに大豆を発酵させ二次加工しないで食べる地域とその方法などについて論じられた。次いで、和田氏が民俗分布地図などを活用しながらコビルという間食用語を例にあげ、ことばと民俗の関わりについて述べられた。なお、本講座は相模民俗学会からの全面的な協力をいただき、共催として行った。

(担 当) 佐川和裕

■刊行物

- ・企画展チラシ「相模湾の貝類Ⅰ－大磯海域にすむマキガイ－」 A4版 — 2,000部（平成10年7月刊）
- ・Report－大磯町郷土資料館だより－16号 B5版 12頁 2,000部（平成10年8月刊）
- ・企画展リーフレット「日本列島エハガキ紀行」 A4版 4頁 4,000部（平成10年10月刊）
- ・常設展リーフレット「BIN」 4頁 2,000部（平成10年12月刊）
- ・年報－平成9年度－ A4版 32頁 800部（平成10年12月刊）
- ・企画展チラシ「地中からの足音Ⅱ－近年の発掘調査の成果－」 A4版 — 4,000部（平成11年3月刊）

■調査・研究・普及

<調査、研究発表、普及等>

- ・考古歴史民俗自然資料調査（年間、大磯町内外）國見 徹、佐川和裕、北水慶一
- ・県博物館協会会報編集委員会出席（年間、神奈川県立歴史博物館）國見 徹
- ・県博物館協会自然部会研修会参加（5月12日、横浜市緑政局都築自然公園建設事務所）北水慶一
- ・駒澤大学博物館学講座（6月14日、当館）國見 徹
- ・中郡小学校教育研究会社会科部講義（7月29日、当館）佐川和裕
- ・東海道400年情報交換会出席（7月30日、9月17日、11月26日、神奈川県立歴史博物館）佐川和裕
- ・七夕保存会研修会引率（8月26日、大山阿夫利神社）佐川和裕
- ・地方史研究協議会準備大会研究発表（9月20日、神奈川県立公文書館）國見 徹
- ・日本民俗学会第50回年会発表（10月4日、京都佛教大学）佐川和裕
- ・環境教育シンポジウムパネラー（10月13日、町立福祉センター）北水慶一
- ・地方史研究協議会第49回大会発表（11月1日、川崎市市民ミュージアム）國見 徹
- ・山西小学校2年生活科講義（11月5日、山西小学校）佐川和裕
- ・県博物館協会人文部会研修会参加（12月18日、在日アメリカ海軍横須賀基地司令部）國見 徹、佐川和裕
- ・平塚市美術館広重わらじ旅解説（平成11年1月17日、大磯町内）佐川和裕
- ・日本貝類学会創立70周年記念大会参加（1月31日、国立科学博物館分館）北水慶一
- ・大磯・国府・二宮小学校3年社会科講義（1月20日、2月17日・24日、各小学校）佐川和裕

<施設・展示解説>

- ・国府小学校6年（4月23日、36人）
- ・NHK文化センター川越（5月14日、38人）
- ・町田市神奈川景勝会（6月13日、33人）
- ・秦野市立大根公民館 夏休み移動教室（8月28日、30人）
- ・北橋村文化財調査委員（9月18日、10人）
- ・NHK文化センター東陽町（12月9日、40人）
- ・横須賀好古会（12月4日、20人）
- ・江戸民具街道 博物館めぐり（2月9日、45人）
- ・横浜岩崎学園（3月20日、15人）

<執筆>

- ・佐川和裕

- 1998.5 「資料紹介 折口信夫関連資料」『民俗』第164号 相模民俗学会
- .7 「コラム 一軒に残された布『布のちから 布のわざ』」国立歴史民俗博物館企画展示図録
- .8 「海水浴場と漁港 一場をめぐる軋轢と選択」『地方史研究』第274号 地方史研究協議会
- .10 『日本列島エハガキ紀行』大磯町郷土資料館企画展リーフレット

1998.12 「館所蔵民具目録―農具Ⅰ―」『年報―平成9年度―』大磯町郷土資料館
・國見 徹

1998.10 「羈旅の什器―人の移動の進暢と汽車土瓶―」『地方史研究協議会大会発表要旨』地方史研究協議会

1999.3 『神奈川県博物館協会会報』第70号（共編著）神奈川県博物館協会

■博物館実習

博物館学芸員資格取得のための実習として3大学4名の学生を受け入れた。実習期間は9月30日および12月1日～12日の延べ12日間とした。例年は9月に実施しているが、本年度は国体開催等のために日程を変更した。しかし、この時期は卒業論文や就職活動などと重なり、特に4年生に対しては負担を強いる結果となった。カリキュラムについては別表のとおりである。前半は地域博物館の実情について学ぶことを基本とした総合的な内容とし、後半は常設展示室の一部展示替えを通して企画立案から完成までの実践的な作業を行った。

当館の実習の特徴は、実習生に対して学芸員が全員で対応することにある。また、実習生に専攻分野は問わない。実際の実習では分野ごとに振り分けて作業を行うこともあるが、実習生ひとりひとりの仕事をそれぞれお互いが見通せるような形で進めており、合わせて館全体が常に見えることを心掛けている。つまり、各分野が必要とする知識や作業（技術）は経験的な部分が多く僅かな実習期間では限界があるため、まず、地方自治体の小規模な博物館の実態を見てもらうことを第一義としているのである。そして、全体の流れの中でひとつひとつの実務を経験し理解してもらうことが大切だと考えている。当館では、小さな博物館だからこそできる実習内容を目指してきた。実習生受け入れ当初から「展示替実習」を取り入れてきた理由もそこにある。いずれにしても、小規模の体制の中で受け入れていかざるを得ないため、背伸びせずに実情に合った形で進めていくことを前提としつつ、今後も一層効果的な実習内容を検討していく必要がある。

<実習生>

横山洋子（駒澤大学）、野田武志（同）、栢沼奈佳（東海大学）、平田直史（桜美林大学）

<カリキュラム>

9月30日(水)	ガイダンス、館内見学	12月6日(日)	実技実習（資料取扱い、梱包、16mm映写他）
12月1日(火)	講義、町内施設見学	12月8日(火)	展示替実習（企画立案、資料調査）
12月2日(水)	考古系実習（資料洗浄・接合）	12月9日(水)	展示替実習（旧展示片付、資料調査）
12月3日(木)	考古・民俗系実習（測量・聞取調査）	12月10日(木)	展示替実習（写真撮影、展示器材作成）
12月4日(金)	考古・民俗系実習（測量・聞取調査）	12月11日(金)	展示替実習（資料展示、リーフレット作成）
12月5日(土)	自然系実習（ミニ観察会、資料取扱い）	12月12日(土)	展示替実習（資料展示、記録）、総括

（担当）國見 徹、佐川和裕、北水慶一

■博物館資料の収集と利用

<寄贈資料>

(敬称略)

No.	受入年月日	資料名	数量	受入先	No.	受入年月日	資料名	数量	受入先
0501	H10. 5. 7	ビール壺	4	渡邊恵子 大磯町東町	1003	H10.10.22	ジューロータ	1	岩崎侯橋 大磯町生沢
0502	5. 5	衣類、磁器	一括	尾崎芳治 大磯町大磯	1004	10.22	本箱、書籍	19	山口 進 大磯町国府本郷
0503	5. 5	時計	1	関野浪子 大磯町大磯	1005	10.22	書籍	1	飯田福信 大磯町大磯
0601	6. 5	刺子半纏 他	4	真壁清一 大磯町大磯	1006	10.23	機関銃の弾丸 他	35	木村純子 大磯町大磯
0602	6. 9	アオバト	1	澤田美喜記念館	1101	11. 6	衣類、蝶	19	木村純子 大磯町大磯
0603	6. 9	蝶標本	6	木村純子 大磯町大磯	1103	11.11	衣類	3	木村純子 大磯町大磯
0604	6.10	テンビンバカリ 他	4	真壁清一 大磯町大磯	1104	11.17	箆筍、膳 他	一括	西海 誠 大磯町大磯
0605	6.10	袴	1組	青木貞夫 大磯町高麗	1105	11.17	机、椅子	5	JR大磯駅
0606	6.12	守札、千本格子	一括	真壁清一 大磯町大磯	1106	11.18	衣類 他	9	木村純子 大磯町大磯
0801	8.13	安田善次郎邸 設計図	19	安田建一 大磯町東小磯	1107	11.29	状差し	1	飯田福信 大磯町大磯
0803	8.27	衣類、蝶	250	木村純子 大磯町大磯	1201	12. 1	絵はがき 他	389	守屋靖子 横浜市青葉区
0901	9. 9	掛軸	1	大川秋俊 大磯町月京	1202	12. 3	木銃 他	一括	西山敏夫 二宮町山西
0904	9.18	衣類、蝶	31	木村純子 大磯町大磯	1203	12. 8	オキボッコ 他	3	加藤勝蔵 大磯町大磯
0905	9.24	古文書 他	一括	西山敏夫 二宮町山西	0201	2. 2	ソロバン、カルタ	2	匿名
0906	9.25	片口、蝶	34	木村純子 大磯町大磯	0301	3. 1	衣料切符入れ 他	19	木村純子 大磯町大磯
1001	10. 6	衣類、蝶	53	木村純子 大磯町大磯	0302	3.12	電卓	1	飯田一夫 大磯町大磯
1002	10.20	書籍、蝶 他	41	木村純子 大磯町大磯	0303	3.15	焼酎瓶 他	22	星野喜三郎 小田原市扇町

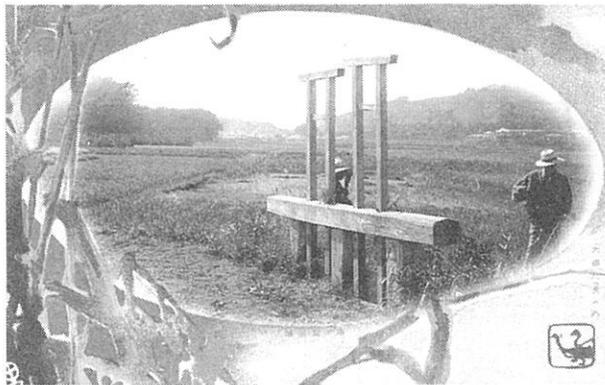
<寄託資料>

(敬称略、寄託期間：H10.4.1～H12.3.31)

No.	受託年月日	資料名	数量	受託先	No.	受託年月日	資料名	数量	受託先
0401	H10. 4. 1	雛人形	一式	田川順三 横浜市緑区	0411	H10. 4. 1	七夕資料 他	一括	小見康夫 西小磯西子ども会
0402	4. 1	高札	3	坂井保治 大磯町黒岩	0412	4. 1	四季耕作図 他	9	守屋町子 大磯町黒岩
0403	4. 1	一本松講中資料	一括	宮代治吉 大磯町大磯	0413	4. 1	稲荷講資料	一括	中村晴夫 大磯町西小磯
0404	4. 1	菊池重三郎資料	一括	菊池なつみ 大磯町大磯	0414	4. 1	掛軸 他	一括	斎藤文雄 西小磯(東西)区
0405	4. 1	サフラン看板	1	添田佐助 大磯町国府本郷	0415	4. 1	統監帽 他	一括	斎藤文雄 西小磯(東)区
0406	4. 1	掛軸	1	高木とみ子 大磯町西小磯	0416	4. 1	獅子頭	2	原田繁雄 裡道区
0407	4. 1	書(断片)	一括	加藤文八 平塚市諏訪町	0417	4. 1	書籍 他	一括	飯島成三 横浜市中区
0408	4. 1	古文書	一括	後藤 勲 大磯町月京	0418	4. 1	吉田茂杯 他	5	本田博造 大磯中学校
0409	4. 1	稲荷講資料	一括	戸塚 浩 大磯町西小磯	0419	4. 1	古文書	一括	近藤敬一郎 東京都新宿区
0410	4. 1	書籍	2	山川 正 大磯町月京	0903	9. 4	鎌倉囃子道具	一括	渡邊長吉 大磯町西小磯

<購入資料>

No.	購入年月日	資料名	数量	購入先
0802	H10. 8.26	錦絵、絵はがき	2	すりもの堂書店



絵はがき (購入)

<資料の館外貸出>

資料名	点数	利用目的	期間	申請者	資料名	点数	利用目的	期間	申請者
衣類	一括	展示	H10. 4. 5 ～ 9. 1	国立歴史民俗 博物館	書籍	12	参考資料	H10. 9.29 ～10.18	南足柄市 郷土資料館
古文書 (鳴立庵文書)	8	町史編纂	4.16 ～ 4.30	大磯町企画 政策室	古文書 (旧高麗寺村文書)	1	町史編纂	12. 9 ～12.25	大磯町企画 政策室
古文書 (旧中川良知家文書)	1	町史編纂	5.14 ～ 5.29	大磯町企画 政策室	古文書 (近藤俊雄家文書 他)	3	町史編纂	H11. 1. 7 ～ 1.14	大磯町企画 政策室
古文書 (旧小島本陣文書)	1	町史編纂	6. 3 ～ 6. 5	大磯町企画 政策室	注口土器 他	28	町史編纂	1. 7 ～ 2.26	大磯町企画 政策室
ツキンボ 他	5	小学校講義	6.24 ～ 7.13	個人	テンビンバカリ	1	参考資料	1.17 ～ 1.20	個人
銅印 他	17	展示	6.28 ～ 9. 6	平塚市博物館	古文書 (近藤俊雄家文書)	1	町史編纂	2. 5 ～ 2.12	大磯町企画 政策室
化石	15	展示	7. 9 ～ 9. 4	相模原市立 博物館	ビデオテープ (展示映像)	1	参考資料	2. 6 ～ 2.13	個人
ビデオテープ (展示映像)	1	ホームページ	7.28 ～ 8.16	大磯小学校	槍先型尖頭器	1	中学校講義	2. 9 ～ 2. 9	個人
水槽、顕微鏡 他	10	行事	9. 4 ～ 9. 8	大磯町建設課	写真	1	刊行物掲載	2.15 ～ 2.22	朝日新聞社
ビデオテープ (鎌倉囃子)	1	授業	9. 5 ～ 9.24	大磯中学校	掛軸 他	3	祭礼	3. 5 ～ 3. 9	西小磯東・ 西区
古文書 (旧小島本陣文書 他)	3	町史編纂	9.24 ～ 9.30	大磯町企画 政策室	写真	1	刊行物掲載	3. 5 ～ 5. 6	個人

<資料の特別利用>

資料名	点数	利用方法	年月日	申請者	資料名	点数	利用方法	年月日	申請者
資料館館内	—	撮影/放映	H10. 4.23	(社)神奈川ニュース 映画協会	絵はがき	5	複写/展示	H10.10. 6	大磯町経済 観光課
資料館館内	—	撮影/掲載	5.14	東京電力(株)	資料館館内	—	撮影/掲載	11.26	(株)ジェイアール 東日本企画
大磯・二宮層産化石	一括	撮影/掲載	5.20	相模原市立 博物館	資料館館内	—	撮影/発表	12. 9	個人
錦絵、絵はがき 他	14	撮影/放映	6.11	NHK番組 制作局	写真	1	複写/掲載	12.14	(株)プレーン プール
資料館館内	—	撮影/発表	8. 9	個人	古文書	3	撮影/掲載	H11. 1. 7	(株)コクサイクリエ エイティブセンター
資料館館内	—	撮影/発表	8.19	個人	資料館館内	—	撮影/発表	1.17	個人
絵はがき	—	撮影/掲載	9. 9	(有)神田組	懐中時計台	1	撮影/復刻	1.31	個人
錦絵、絵はがき	7	撮影/放映	9.17	NHK横浜 放送局	資料館館内	—	撮影/掲載	2.20	毎日新聞社
絵はがき、資料館館内	14	撮影/放映	9.20	共同 テレビジョン	資料館館内	—	撮影/掲載	2.25	個人
写真	1	複写/掲載	9.29	個人					

<文献寄贈機関・団体>

—県内—

神奈川県／神奈川県科学技術政策室、神奈川県教育庁、神奈川県自然保護センター、神奈川県市町村振興協会、神奈川県湘南なぎさ事務所、神奈川県農政部水源の森林推進室、神奈川県博物館協会、神奈川県民俗芸能保存協会、神奈川県立金沢文庫、神奈川県立公文書館、神奈川県立生命の星・地球博物館、神奈川県立埋蔵文化財センター、神奈川県立宮ヶ瀬ビジターセンター、神奈川県立歴史博物館、(財)かながわ考古学財団、(財)神奈川文学振興会、地球市民かながわプラザ

横浜市／神奈川地域史研究会、神奈川大学日本常民文化研究所、グリーンタフ事務局、寺家ふるさと村四季の家、玉川文化財研究所、(財)馬事文化財団、横浜市立金沢動物園、横浜自然観察の森、横浜市歴史博物館、(財)横浜市勤労福祉財団、横浜マリタイムミュージアム、横浜市教育委員会、横浜市ふるさと歴史財団

川崎市／川崎市市民ミュージアム、川崎市立日本民家園

横須賀市／横須賀市自然・人文博物館、横須賀市教育委員会

鎌倉市／鎌倉国宝館、鎌倉文学館、鎌倉市教育委員会

藤沢市／江ノ島水族館、日本大学生物資源科学部資料館、藤沢市教育委員会、藤沢市文書館、藤沢市湘南台文化センター

茅ヶ崎市／茅ヶ崎市文化資料館、茅ヶ崎市教育委員会、茅ヶ崎市文化振興財団

相模原市／相模原市立相模川ふれあい科学館、相模原市立博物館、相模原市教育委員会

海老名市／海老名市教育委員会

大和市／大和市教育委員会

綾瀬市／綾瀬市秘書課、綾瀬市教育委員会

座間市／座間市教育委員会

厚木市／厚木市教育委員会、厚木市郷土資料館

秦野市／丹沢自然保護協会、秦野市総務部情報課

平塚市／東海大学校地内遺跡調査団、平塚市博物館、平塚市教育委員会、平塚市中央図書館

小田原市／小田原城天守閣、小田原市教育委員会、小田原市郷土文化館、報徳博物館

南足柄市／南足柄市郷土資料館

葉山町／葉山しおさい博物館

寒川町／寒川町企画部町史編さん課

二宮町／徳富蘇峰記念館、二宮町教育委員会

開成町／開成町教育委員会

山北町／山北町教育委員会

箱根町／箱根町立郷土資料館

真鶴町／真鶴町立中川一政美術館

愛川町／愛川町教育委員会

大磯町／高麗山神輿保存会20周年記念事業実行委員会

—県外—

東京都／板橋区立郷土資料館、江戸東京たてももの園、青梅市郷土博物館、青梅市教育委員会、大田区立郷土博物館、表千家同門会東京都連合支部、お茶の水女子大学学芸課程、外務省外交資料館、儀礼文化学会、くにたち郷土文化館、(株)コクヨ、世田谷区教育委員会(民家園)、たばこと塩の博物館、(株)丹青研究所、調布市郷土博物館、東海道ネットワークの会、東京都江戸東京博物館、豊島区立郷土資料館、東京家政学院生活文化博物館、大島町役場、東京学芸大学教育学部生涯教育研究室、日本ユネスコ協会連盟、(財)日本博物館協会、日野市教育委員会、府中市郷土の森博物館、福生市郷土資料室、(株)ブレーンプール

北海道／アイヌ文化振興・研究推進機構、(財)アイヌ民族博物館、北海道開拓の村

岩手 県／前沢町立牛の博物館
群馬 県／北橋村歴史民俗資料館、北橋村教育委員会
栃木 県／小山市立博物館、栃木県立しもつけ風土記の丘資料館
茨城 県／東町立歴史民俗資料館、上高津貝塚ふるさと歴史の広場、土浦市教育委員会
千葉 県／市立市川自然博物館、市立市川歴史博物館、国立歴史民俗博物館、佐倉市立和田公民館、佐倉市
教育委員会、館山市立博物館、千葉県立中央博物館、松戸市博物館
埼玉 県／大井町教育委員会、埼玉県立博物館、三芳町教育委員会
山梨 県／環境庁自然保護局生物多様性センター、若草町教育委員会
長野 県／茅野市八ヶ岳総合博物館、藤村記念館
静岡 県／静岡県立美術館、静岡市立登呂博物館、沼津市歴史民俗資料館、浜松市博物館、藤枝市郷土博物
館、藤枝市教育委員会、焼津市歴史民俗資料館
愛知 県／安城市歴史博物館、豊橋市美術博物館友の会、豊橋市二川宿本陣資料館、豊橋市自然史博物館、
常滑市民俗資料館
岐阜 県／多治見市文化財保護センター
滋賀 県／大津市歴史博物館
京都 府／(株)京都科学、京都橘女子大学、舞鶴市赤れんが博物館、向日市文化資料館
大阪 府／大阪市立自然史博物館
奈良 県／奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター
三重 県／亀山市歴史博物館、鈴鹿市考古博物館、藤原岳自然科学館、(株)御木本真珠島
兵庫 県／神戸市立博物館
鳥根 県／鳥根県埋蔵文化財センター
愛媛 県／愛媛県歴史文化博物館

研 究 報 告

国府祭について

摘み草の会

後藤ひろ子 中村 ふじ 熊沢 聖子
滝沢すみ子 渡辺 信子 滝口美代子
北村 和江 鶴飼レイ子 望月 定子

私たちの町大磯には大きな祭りが幾つかあるが、神奈川県が無形民俗文化財に指定されている「国府祭（こうのまち）」は特に有名である。

その昔、余綾郡柳田の地に国府が置かれたといわれているのが国府本郷の地である。その頃、国司が政治、祭祀を行うため相模の大社である寒川神社、川勾神社、比々多神社、前鳥神社、平塚八幡宮を集め、国家安泰と五穀豊穡を祈った。神揃山で行われる「座問答」とは、この時行われる珍しい行事である。また、大矢場で行われる五社分

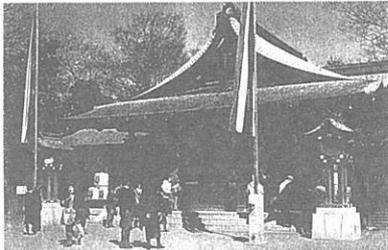
霊の祭典など、中央政府と地方の政治が祭（政）りの形になり、物語のように進められて行く古式豊かな祭典である。

千有余年続いてきたこの祭りも、時代の流れの中では、財政面やその外の理由で神輿渡御を中断した神社もあったが、その間も祭りは続けられ、数年後には、また復興して以前どおり六所神社を含めた6社が揃うようになった。

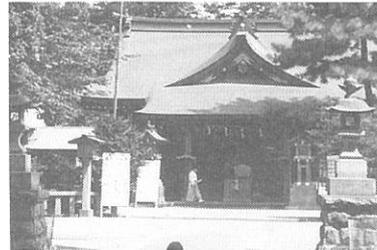
このような祭りを町に住みながらよく分からないまま過ごしてきたが、少しでも祭りの意味を知ろうと、私たち「摘み草の会」では、六所神社の宮司さんから祭りの成り立ち、行事の進め方などのお話を聞かせていただいた。そこで、私たちは祭りの全体像をカメラに収め記録しておくことを思い立った。5月5日の国府祭はもとより、それに至る準備の様、また、地区の皆様の祭りへの関わり方などが少しずつ見えてくる中で、私たち

祭神

- ・一の宮寒川神社（寒川町宮上）
寒川比古命・寒川比女命



- ・四の宮前鳥神社（平塚市四之宮）
菟道稚郎子命・大山咋命・日本武尊



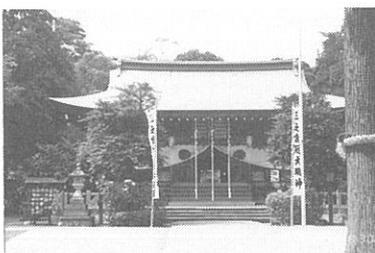
- ・二の宮川勾神社（二宮町山西）
大物忌命・級津彦命・級津姫命・大名牟遲命・衣通姫命



- ・平塚八幡宮（平塚市浅間町）
応神天皇・神功皇后・武内宿称



- ・三の宮比々多神社（伊勢原市三之宮）
豊斟淳尊・稚日女命・天櫛王命・日本武尊



- ・六所神社（大磯町国府本郷）
櫛稻田姫命・素盞鳴命・大国主命



も祭りへの思いを深くしていった。本報告を通して貴重なこの祭りを少しでも理解できたらと思っている。

平成7年における祭事は次の日程で行われた。

◆六社の集まり（3月吉日）

今年も国府祭を行うの確認。大磯松月さんで開催された。

◆準備設営（4月29日～5月4日）

4月29日には、馬場地区の方々の奉仕により、祭（斎）場および通路（登り口）の清掃が行われた。雨上がりのあまり天気の良い日ではなかったが、朝早くから大勢の方々が参加された。

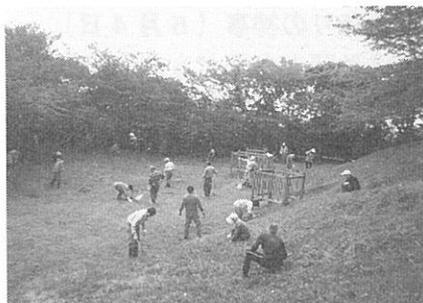
祭礼時に、神に供え、氏子や参拝者に授与されるチマキは、各神社の氏子や職員により決められた日に作られる。

ちなみに、六所神社では役員の方々が4月30日にチマキを作る材料の茅を石神台に取りに行く。そして、5月2日午後1時、六所神社境内において各地区（新宿、中丸、馬場）の役員の方々が集まってチマキ作りを行う。これは茅の中に小さな細長い餅を入れて包み、ミゴで丁寧に3箇所を縛って作る。ミゴというのは稲の芯であるが、最近では手に入りやすく、寒川神社では麻の葉で縛っているという。作り方は単純な作業のようだが気を遣う。私たちも指導を受けて作らせていただいたが、意外と難しいものだった。これらのチマキはそれぞれの神社によって作り方も数も違う。また、縛り方にも特徴が見られる。なお、六所神社は2000本作った。

各神社の日程とチマキの本数は次のとおり。

- ・寒川神社 5 / 4 2000本
- ・川勾神社 5 / 2～3 2300本
- ・比々多神社 4 / 27～28 1000本
- *茅も餅も干すので他の神社より早く作る
- ・前鳥神社 5 / 4 4000本
- ・八幡宮 5 / 3～4 1300本

また、5月3日には行在所、化粧塚作りが行われる。行在所とは神揃山に一の宮、二の宮、三の宮、四の宮、八幡宮の神輿のお在りになる場所をいう。また、化粧塚は祭場に上る前にそれぞれ所定の場所で衣服を整えるところである。なお、本年度の神揃山（五社）と大矢場（六社）のテント張りの当番は、中丸と馬場地区であった。



草刈り



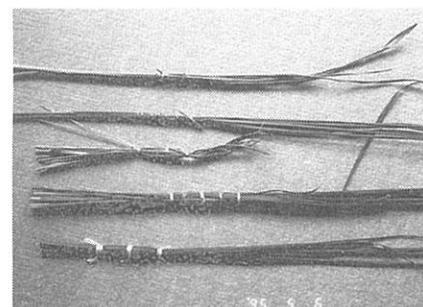
祭場の整備



チマキ作り



出来あがり



五社のチマキ

◆道浄めと浜降りの神事（5月4日）

道浄めは宮世話人や子どもたちが五社の神輿の通る順路を浄めていく行事。5月4日の午後1時から行われる。近在の小学高学年男子が六所神社に参集し、太刀、旗、槍などを持ち、神官や役員とともに五社の通り道を「ヤートサカエ（セ）」と勇ましい掛け声で浄めてまわる。「ヤートサカエ（セ）」は「永遠に栄えあれ」の意味である。

浜降りは、以前は道浄めを終えた後、引き続き隊列に神官を迎え、共に浜へ降りて波打ち際に幣を立て、祝詞を奏上して一同を浄めた。そして、足跡のない砂を手桶に入れて子どもたちが担いで大矢場の行在所に撒いて浄める。これらの神事は体力がいり、お年の方には少々つらいもののように、「体力テストだ」などと囁かれていた。なお、現在は両行事を同時に行っている。



宮世話人の御浄め



足跡のない砂を集める



宮立



手桶に入れた砂を子どもたちが運ぶ



道を浄める（国府新宿）



神揃山を浄める



神官儀式

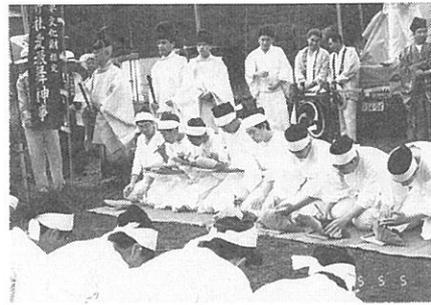


大矢場を浄める

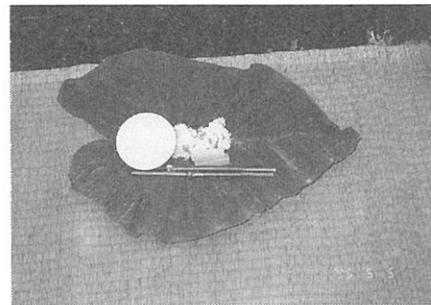
◆ 前鳥神社の麦振舞神事と化粧塚

前鳥神社の神事で、神揃山の登り口近くの化粧塚で行われる。担ぎ手である10代の若者の白丁の力づけのためにご馳走する行事である。オコワの中に唐辛子と味付けした干大根を混ぜ、それをサトイモの葉にのせ、お神酒の後に竹の箸で食する。現在は氏子の主婦たちにより作られる。なお、この神事は平塚市の重要文化財に指定されている。

また、化粧塚というのは、各社所定の場所に作られ、忌み竹が立てられて注連が張られる。神輿の渡御の途中に、この上に据えられ休息するところである。また、衣服を整え、神揃山へ登る準備もする。



麦振舞神事



馳走



麦振舞の仕度



神揃山登り口手前の化粧塚



祝詞を奏上する



神揃山中の化粧塚



御神酒を戴く



馬場道にある化粧塚

◆五社奉迎の神事

5月5日の当日は、昨夜来の雨も上がり、朝もやの立つ頃より五社が出立し、11時頃までに神揃山に集う。途中、国府地区入口で六所神社からの在庁と呼ばれる迎神使の出迎えを受ける。これは五社それぞれ所定の場所がある。守公神（榊）を宮司よりいただく。

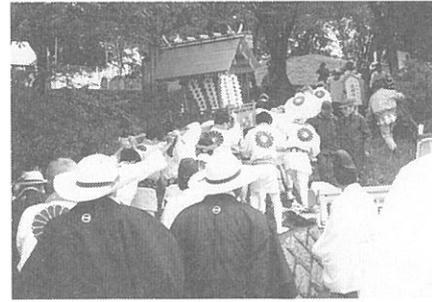
出迎え場所は、

- ・一の宮、四の宮、八幡宮 切り通し口
- ・二の宮 国府新宿の変電所前
- ・三の宮 神揃山西登り口

また、在庁とは国司の庁に勤務し、事務を行う下役人。おおむね現地の土豪から任じられた。現在は一の宮、二の宮、四の宮、八幡宮は国府新宿、中丸区長が在庁役でお迎えする。三の宮は馬場の中村氏と近藤氏が昔からその役を行っている。迎神使の迎えを受けた後、それぞれの登り口より神揃山に向かう。



三の宮触れ太鼓



一の宮神揃山へ登る



奉迎神事（八幡宮）



二の宮



二の宮



奉迎神事（二の宮）



三の宮



奉迎神事（三の宮）



四の宮



八幡宮

◆五社祭典、座問答

神揃山では一の宮から順に行在所に入り、儀式が行われる。

五社が神揃山行在所に着座後、三の宮は餅撒きの行事を行う。力石の上に餅の入った俵を、担ぎ手たちが頭上より高く持ち上げては落とす。俵が破れ中の餅が出ると、それを人々に投げる。餅には無病息災の効用があるということで参拝者は争って拾う。

また、三の宮の神輿のわらび手には白く細長い包みを頂いているが、これは三の宮の御霊明神で、江戸時代頃より馬場の中村家にて預かり、在庁としてお迎えに出る際に持ち、神輿に飾る。還御の時に外し、また、中村家が1年お守りをするとの事である。

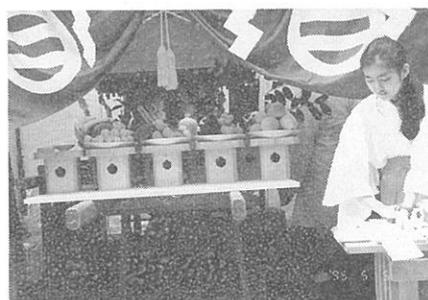
12時を合図に有名な座問答が始まり、大勢の人たちの輪の中で古式豊かな儀式が執り行われる。威儀を正して並ぶ神官、忌竹の中での虎の皮を進める神事。この神事には諸説あるようで今だ謎めいている。



座問答



一の宮御座所入り



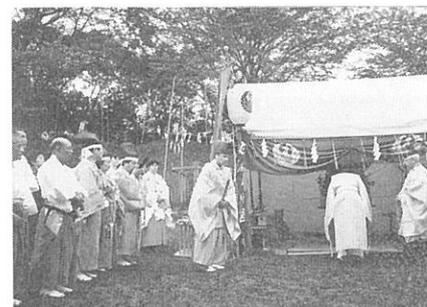
二の宮



三の宮



四の宮



八幡宮



“力石”三の宮



“御霊をいただく”三の宮神輿

◆迎神の儀、宮立、見合の式

七度半の迎神の儀が行われる。各宮から1人ずつ選ばれた五社の総代（5名）が、陣笠、袴姿で青竹の杖をつき、「総社奉迎使」と書いた幟を先頭に六所神社へお迎えに参る。総社のおいでを願う使いの儀である。「七度半の使い」と言われた昔は、8度目に総社が出立したが、現在は1度である。六所神社を宮立し、子どもたちによる太刀、旗、槍などを従え、国司と神官は馬上にて堂々と進む。現在、国司は町長が務めている。衣服は平安時代の宮中を参考に、菅原道真を模して作られたという。見合の式では、神揃山の坂の途中にある見合い松と、下の大矢場道の化粧塚にある見合い松の所で、神揃山の一の宮と下の総社の御輿がお互い正面を向け合い、両社が祝詞をあげたことによる。現在は上の松は枯れ、一の宮はこの式を行っていない。総社のみ行っている。総社は神揃山に向かい祝詞を奏上した後、再び馬上にて大矢場へと向かう。



総社宮立



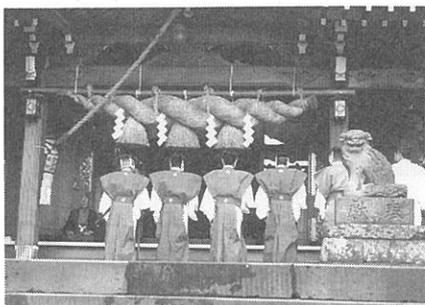
国司・宮司大矢道を行く



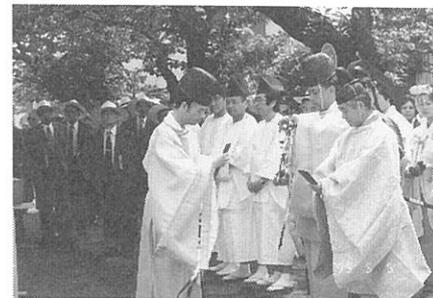
七度半の迎神の儀



総社神輿化粧塚にお成り



五社拝礼



見合の松の神事



総社大矢場祭典（七十五膳献上）

◆大矢場（逢親場）祭典

総社が大矢場に着くと同時に、舞台上の舞大夫により鷺の舞が始まる。舞いには鷺・竜・獅子の3種類の仮面があり順次舞う。舞い手としては、江戸時代六所神社の社役として舞大夫家が8軒（萩原左内・萩原伝兵衛・小沢兵庫・笠高惣太夫・笠高掃部・大橋監物・松永喜兵衛・松永左京、江戸浅草田村八太夫配下）があり、六所神社近くに住んでいた。現在は伝える人がなく、足柄下郡中井町八幡神社の舞大夫に頼んでいる。これは、六所神社の笠高家が伝えたものであると言われている。曲、舞いともに同じである。

『神奈川の芸能誌』によると、大磯最後の舞い手であった本間清吉はこう語った。

「鷺舞は天から降りてくる悪魔を祓う舞い」

「竜舞は六所神社のまわりを警護する舞い」

「獅子舞は国府祭の神饌を目指して外からやってくる厄神を祓いのける舞い」



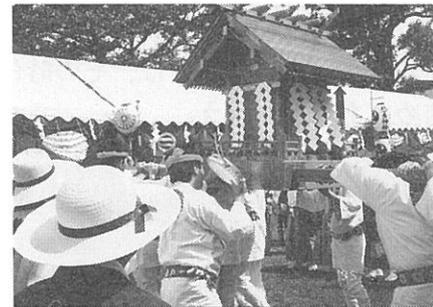
在 庁



大矢場お成り



鷺・竜・獅子舞の仮面



一の宮最初に大矢場にお成り



鷺舞



四の宮御はやし



竜舞



獅子舞



総社神輿

◆大矢場（逢親場）祭典還御

五社大矢場着七十五膳献上が行われる。五社に総社よりお神酒と御供餅が供えられる。昔は七十五膳とって国司から献上された。

次いで、各社の守公神（榊）を六所の御霊の前に供える儀式（神対面神事）が行われる。これは、新しい神々の分霊を六所へ納める式。

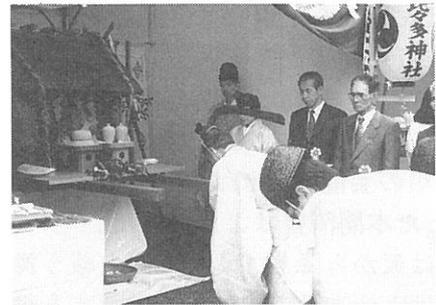
また、国司が一の宮から順に詣で幣を捧げる（国司奉幣）。現在は町長が国司代として平安殿上人・道真風の衣裳を着けている。

最後に総社が八幡宮から順次五社を拝礼し（神裁許）、八幡神社からお帰りになる。大矢場での神輿のお練りは賑々しく大勢の人たちでごった返す。

こうして無事国府祭は終了するが、3月の大磯における6社の集まりから始まって5月5日の国府祭当日まで、神社はもとより地区の方々の並々ならぬご努力がこうして1000年以上歴史の流れの中で祭りを支えられ、全国でも珍しい祭りの形を残し伝えてこられたのだろう。これから先、絶えることなく継承していくことは、その時代を生きる者の務めであるとも思う。



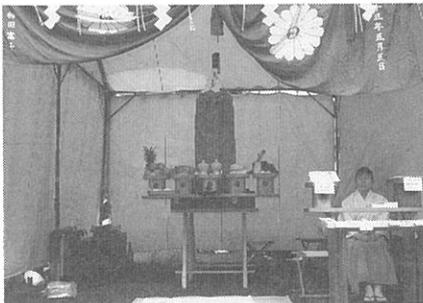
国司奉幣神事



神裁許



八幡宮より順次
五社還御



総社着座



神対面神事



神対面神事



総社還御



総社・五社分霊を鎮める

二宮町山西の民俗 (2)

佐川 和裕

はじめに

本報告は、平成8年度から実施している博物館実習にともなう民俗の聞き取り調査のうち、平成10年度に行った調査のまとめである。調査に至る経緯については既に詳しく述べているのでここでは触れない。また、対象とする地域の概要および話者の履歴と環境についても同書を参照願いたい。

昭和14年

＜ススハライ＞

12月の都合のいい日にススハライ（あるいはススハキ）を行った。大きな家ほどよく行っていたようだった。まず、家の物を全て外に出した。かつてのオウライはほとんど車が通らなかつたため、道の4分の1くらいまでは物を置いても大丈夫だった。畳は上げて運び出し、2枚ずつ立てかけて干し、家の周りを払ってから中を掃除した。天井裏は草箒で払った。ただし、いい家には天井があったが、草葺きの古い家では奥の間にしかなかった。家の中の掃除は若い人の仕事で、手拭いで鼻と口を覆って行った。

昼食にはオムスビを食べた。オムスビは三角形をしており、オニギリとは言わなかった。米1升で23個できた。お昼のあとは、戸を開けて中を掃き、女性が雑巾がけをした。家の周囲や屋内の高い所のススやクモの巣を払うにはシノタケ（オンナタケ）を2、3本束ねたものを使った。干した畳を積み重ね、長い方の両側にシノダケを両手に持った男がバタバタと埃を叩き出し、横にいる男が箒で掃き、他の者が家の中へ運び込んだ。畳の裏には東西の位置などを書きこんだ印がついていた。これが消えていると消し炭で書いておき、この印をもとに畳が敷きなおされた。最後に外に出した物を中に入れた。なお、シノタケは家の裏の土手に生えていた。

＜歳の市＞

12月18日に行われる飯泉の観音さん（勝福寺）の市に始まり、23日の梅沢、24日の二宮、25日の二宮元町（秦野街道）の市というように概ね東へ市が行われた。市で買った食べ物はすぐ食べるが、それ以外の物はすぐには使わない。2銭ほどもら

って買い物をしたが、2銭硬貨は作られていなかったのので1銭を2枚使っていた。50銭銀貨は別名をギザといった。まわりにギザギザがついているのは50銭だけだったのでそう呼ばれていた。

＜餅つき＞

12月27・28日に餅つきをする。ウスは大きな百姓の家など特定の家にしかなかった。ウスを持つ家では夜明け前、朝一番に餅を搗いた。ウスは次から次の家へと借り出され、順番が決まっていた。これは時間を省く知恵だったのでそう呼ばれていた。

分家や近所の家が、一軒の家に集まって行くこともあった。なお、29日はクンチモチといって9が苦につながるために嫌い、餅は搗かなかった。また、搗いた餅は元日になって食べるもので、歳は数え年だから餅を食べると歳をとるといって、元旦の雑煮で祝うまで食べてはいけなかった。元日の雑煮は年男が食べる数を皆に聞いて餅を焼き、子どもは歳の数だけ食べろといわれた。白い餅は元日の朝の雑煮のときだけで、他はアワやキビの入った餅をよく食べた。

＜大晦日＞

年が新しくなると着る者から履く物まで新しくなる喜びから、「もういくつ寝るとお正月…」と歌をうたい指折り数えて待った元日を早く迎えるために子どもたちは早く寝かされた。一般の家庭で年越しソバを食べるようになったのは戦後になってからのこと。

昭和15年

＜紀元節＞

昭和15年2月11日は皇紀2,600年を祝う紀元節で、国をあげての式典だった。この日を境に戦時体制が強化され、それまで何でもなく行われていたことができなくなった。すべてに節目の年となった。

＜おじさんの出征＞

出征の前に、夜、身内や友人が集まってお祝いをし饞別をもらった。この頃は必ず生きて帰ると信じていたので、出征に対して悲愴感はなかった。当日、おじさんと身内とともに家の前で写真を撮った。写真を撮るときのマグネシウムの「ドン」という音が大きくてとても驚いたことを覚えている。出征の際には、幟や旗を押し立て、手に手に日の丸の小旗を打ち振り、町内会、青年団、在郷軍人会、国防婦人会などの団体や、親戚、友人な

ど大勢で「ドンドン ドンガラガッカ ドンドン…」という軍楽隊調の鳴り物で、「天に代わりて不義を討つ…」「勝ってくるぞと勇ましく…」「わが大君に召されたる…」などの軍歌を次から次へとうたいながら駅まで送った。駅前でおじさんがリング箱の上に乗し、大きな声で元気よく「元気で行って参ります」と挙手の礼をすると、在郷軍人二宮分会長の「西山権八君万歳」という発声で皆が万歳三唱をした。

<経済統制令>

統制令によって物の値段が2倍になった。切符がないと物が買えなくなり、配給という形がとられた。勝手に売ってもいけないようになった。また、物が自由に売買できなくなった頃から闇取引という言葉が使われるようになったり、「金鶏輝く日本の栄えある光身に受けて…」と歌った式典歌の替え歌が流行した。「金鶏上がって15銭 光ホウヨク30銭 みんな上がって大闇だ 紀元は2,600年」。それまでゴールデンバット1箱10本入れて（金鶏）8銭、光とホウヨクは15銭だったことを風刺したもの。

<一銭五厘>

上官が兵隊をしかるときに「貴様らは一銭五厘だ」と言っていた。出征を命じるハガキが一銭五厘だったので、兵隊の命は一銭五厘という意味合いで使った言葉だという。

<入学式>

4月1日に二宮尋常高等小学校の尋常科へ入学した。入学式には、母かそれに代わる人が学校へ連れていった。女性は必ずとっていいほど着物に黒い羽織を着た。無ければ借りてでも着て行き、「先生よろしくお願ひします」と挨拶した。

<登校班>

茶屋町の東西で1班、2班に分かれていた。1班、2班は更に男女別に分かれる。男女一緒のことはなかった。登校班の集合場所では、みんなが集まるまで遊んで待っていた。登校するときには2列に並び、1年生が前で高等科の2年生が後ろになり左側通行で歩いた。家のないところでは下水の側溝に蓋がなかった。蓋のあるところでも危ないから蓋の上は歩かないようにした。

下校時は馬力、牛馬力、リヤカー、自転車の往來が頻繁だったため注意して帰った。自動車は少なかった。

<学校の服装>

金ボタンの学童服、半ズボン、ズック（運動靴）。学年、組、名前を記した名札を服に縫い付けた。名前はカタカナ書きだった。名札のところに衣文止めを使ってハンカチをつるした。これは戦後まで続いた。戦争準備のため牛皮はなく、豚皮のランドセルを背負った。ランドセルは上級生になると下級生や弟に譲った。また、ズックのキレでつくったかばんを兄弟から譲り受けていたが、1年生の3学期頃から昔に返って木綿の風呂敷が使われるようになった。教科書と帳面と筆箱を入れた風呂敷を体に結ぶと手があくので鬼ごっこをしながら帰ることもできたし、傘をさす時も便利だった。履物は下駄かワラゾウリだった。

雨の日はカッパを着て長靴をはいていたが、軍事物資優先になってからは下駄になった。冬にはどんなに冷たくても足袋が濡れないように学校へ行くときは素足で行き、教室に着いてから雑巾で足を拭いて足袋をはくようにしていた。一般の家庭では子ども用の小さい傘はなかった。

<朝礼>

朝礼は毎朝あり、月曜日と土曜日には校長訓話があった。学級ごとに二列に並んだ。国旗掲揚の際には「君が代」を高等科の2年生が5人でラッパで演奏された。ラッパの演奏はこの年が最後になった。

<先生の服装>

男の先生は詰襟や背広姿が多かった。女の先生は着物に袴が主で、若い先生は普段はスーツを着ていた。女の先生の髪型は髪を後ろでまとめる形が一般的だった。

<礼と挨拶>

礼には二種類あった。一般的な礼は頭を下げた際に手を体の側面につける形。もうひとつは、頭を下げた際に手をひざにつける形で、このようにすると自然に頭が深く下がる。この礼を最敬礼といった。

学校では「おはよう」「さよなら」の挨拶のしつけがあった。その他、授業中は指されたら元気よく返事をする事、「ハイッ」は1回といった指導があった。

<前置き言葉>

天皇陛下や皇族のお名前を話に出すときは、「かしこくも」「恐れ多くも」といった言葉を前置きに使った。この言葉が出たら直立不動で姿勢を

正し、失礼がないように聞く準備をした。

<歯磨き>

練り歯磨きはあまり使われておらず、スモカという粉歯磨きを使っていた。または指を使って塩で磨いた。学校での歯磨きの指導はなかったが、若い人たちは磨いていることが多かった。学校で虫歯の検査をしたこともあったが、虫歯を気にするという意識はほとんどなかった。

<衛生記念日>

衛生記念日というのがあり、衛生検査や服装検査をおこなった。爪の検査、名札調べ、着物は洗濯してあり清潔かどうかなどを調べた。

<ヨクマナビ ヨクアソベ>

職員室横の黒板には「ヨクマナビ ヨクアソベ」と書かれていた。入学当初は、男組同士で廊下でケンカをよくしたが、始業のサイレンが鳴るとあつという間に教室に戻った。

<帽子掛け>

廊下に釘が打ってあり、シノダケを挟んで帽子掛けが作ってあった。誰がどこに掛けるかという事は決まっていなかった。

<科目>

読み方、書き方、算術、図画、手工、唱歌、修身などがあった。算術は先生に隠れて指を使って計算した。書き方は3学期から始まり、墨だけは支給されたが、他の道具は自分で用意した。墨の摺り方から教わり、新聞紙が真っ黒になるまで練習し、1枚だけもらう半紙に清書して提出した。図画では軍艦の絵を描いたりした。修身は忠孝が規範で、読み方は「サイタ サイタ サクラガサイタ」で始まる『小学國語読本 巻一』で、家へ帰ると大きな声で読んだが、大方の者が三日坊主だった。

<石板>

黒い石の薄い板で、学校から支給された。左に名前、右に学年と組が書かれてあった。ろう石の細いもので書き、消すときは黒板拭きの小さいのがヒモで取り付けてあり、それを使った。よく割れるので、割れると自分で書店で買いなおした。

<1年生の遠足>

春の遠足は二宮を一周した。学校、中里、万年橋、中里から釜野への素掘りのトンネルを抜けて越地を通過して浜へ降りて弁当を食べて遊んだ。弁当と水筒以外に菓子を持って行ってもよかった。

<持物検査>

秋の遠足では菓子を持って行ってはいけないといわれ、泣の原のお地蔵さんだったが、途中で雨になり学校へ引き返して持ち物検査があった。菓子を持っていなければ、先生が白墨で机に○をつけた。×をつけられた者は床に座らされた。立たせるか正座させることが罰だった。ゲンコツでコツンと叱ることはあっても、平手や棒で殴ることはなかった。

<秋の運動会>

底がアメ色のゴムで白い布のタビを選手タビとって運動会にはいた。ハチマキは両面使えるようになっていた。赤、白の両面で母親が作り、名前が筆で書かれた。短くなると新しいものを作り、弟妹に転用した。種目は徒競走、部落(町内)別競争(リレー)、ダルマ運びなどがあった。徒競走は6人ずつ走る。ダルマ運びは組対抗でおこなった。その際、ハチマキで色分けをしていた。徒競走では、1、2位の旗をもらって校長先生のところへ行くと、褒美にボール紙(黒ずんでざらざらした厚紙)を短冊に切って1等賞と書かれたものをもらえた。お金では買えないものだったので、皆とても欲しかった。

<通信簿>

昭和14年度までは黒堅表紙の通信簿だったが、国民学校へ移行するのを見越して、白い厚紙を2つ折りにした単年度の物になった。右側が一学年で、左側が修了の校長印を押すようになっており、その裏が健康診断書になっていた。

<いたずら>

教室の入り口に黒板消しをはさんだりして、恐い先生を恐れずよくいたずらをしかけた。

<夏休み>

夏休みの宿題は出なかった。登校日は4、5日あった。

<弁当箱>

弁当箱は兄から順にお下がりを使った。アルマイトという白い素材で作られていて、日の丸弁当(梅干しひとつ)を続けると、何人目かには蓋に穴があいてしまった。

<医者>

病気にかかっても、よほどのことがない限り医者にはかからなかった。診立てのよくない医者をヤブ医者と呼んだ。家には富山の薬があり、粉薬だった。「馬の小便 水薬」と歌ったが、医者に

かからないと水薬はなかった。

<修了式>

優等賞、皆勤賞が授与された。講堂が無かったので、3尺ずつのアコーデオンで仕切っていた教室をぶち抜いて式を行った。式は一度では入りきれないので、4年生以下と5年生以上の2度に分けて行った。

<ワル>

悪人のことではなく、暴れ馬のように元気が良すぎる者に対して使われる呼び名だった。腕白と同義語。

昭和16年

<二宮町国民学校初等科>

昭和16年、尋常高等小学校から中郡二宮町国民学校初等科第2学年に変わった。新生が入り、面倒を見るようになって学校が楽しくなってきた。

<凱旋>

凱旋した人の手柄話を賑やかに聞いて過ごした。しかし、無言の凱旋といって白木の箱に入り、白い布で首から下げられての帰還は、出征のときの賑やかさとは反対に言いようのない寂しさがただよった。

<非国民>

出征は20才の青年の義務だった。逃げた場合は非国民と呼ばれ、中国・朝鮮などへ逃げ回ることとなった。身内も世間に顔向けできないくらい肩身の狭い思いをした。

<大日本国防婦人会>

白い割烹着に「大日本国防婦人会」と書かれたタスキを掛けたおばさん達で、出征兵士を送り、その家庭の老父母の面倒をみたり、戦死者を迎えたり、国防献金、千人針、防空訓練などで「銃後の守り」に明け暮れていた。

<青年学校>

高等科2年を卒業した後、任意で夜間に通う学校。昼間は家業を手伝うなどしている人が通ったもので、高等科の校舎を使った。このような学校が昭和16年以来増えた。

<科目の変化>

国民学校では、算術は算数に、唱歌は音楽に、手工は工作になった。

<楽譜>

2年生の3学期、音楽で音階がドレミファソラ

シドからハニホヘトイロハに変わった。

<学校の掃除>

掃除は6時間目の終了後。1、2、3年生はそのまま帰り、上級生が各教室の掃除を割り当てられ、便所掃除も行った。

<偏平足の検査>

5月頃、先生が一人ずつ雑巾の上に足を載せ、床に足を置かせて偏平足の検査をした。兵隊の行軍（移動）に偏平足は弱いため、それを調べた。

<2年生の春の遠足>

二宮から大磯まで歩いた。神揃山（カミソリヤマ）を通り、嶋立庵から浜へ出て大磯の港へ行った。浜で弁当を食べて遊んだ後、大磯駅へ行き、帰りは車で帰った。汽車賃は4銭だった。ほとんどの者が汽車に乗ることが初めてだったため、その喜び様はたいへんなものだった。上に開けた窓から外へ頭を出すのを禁じられていたが、電柱に頭が当たりそうで恐かった。なお、そのときの3年生は小田原、4年生は江ノ島、5年生は鎌倉、6年生は横浜で、往復汽車だった。

<国府祭（コウノマチ）>

6月21日。二宮町は、二宮、中里、川勾、山西、一色が明治23年に合併したもので、神輿の番が西から順にまわる。曜日を問わず行われたが国府祭へ行くと行って早退すれば、学校は欠席扱いにはされなかった。

学校から帰るとすぐに、竹（シノダケ）を持って川勾神社へ行き、幟を1枚取って仕立て、2年生ぐらいから6年生までが神輿を先導しながら駆け、ときおり幟を天へ突き上げるように「ヤーットコ サカセ」と言いながら走った。幟には「奉納二宮大明神」と大きく書かれていた。5年生までは用意されたものを使うが、6年になると筆の立つ人を書いてもらって作って奉納した。神揃山では、神輿の前に太い綱をつけ、氏が上から坂道を引き上げた。神輿が着座すると、幟の竹を西の空へ向けて投げ捨て、幟は神社へ返納した。

<国民学校手帳>

成績がつけられているもので、ゴム印で評価が押されていた。尋常小学校時代の甲乙丙丁や10点評価と変わって、優、良上、良、可の4つの評価になった。

<アイスクリーム>

2年生の夏休みに大船駅でアイスクリームを買ってもらった。小さな折り箱に入っていて、木の

匙でたべる。ザラザラしていてすぐに溶けてしまった。10銭だったが、けっこう高い物だった。

<簡単服>

この頃から着る人が増えてきた。今で言うワンピースのことで簡単服と呼んでいた。着物に比べ簡単に着られるという意味だったのだろう。

<隣組>

隣組がつくられ、「トントントンカラリンと隣組」という歌が口ずさまれるようになった。回覧板ができて、「云い伝え」は急ぐ場合だけとなった。なお、江戸時代以来の五人組はホングミと呼ばれるようになった。

<九九>

2年生の2学期に先生が替わり、若い女の先生は新しい教え方で、掛け算を先取りして予想外の授業となり、1日を当てられた。

<頭さわり>

二手に分かれて、頭をさわったら勝ちという遊び。不意に後ろから攻めても、この遊びだけは卑怯とは言われなかった。校庭全土を使い、3人で組むと「日独伊三国同盟」といった。

<大東亜戦争>

12月8日に開戦。毎日ラジオで大本営発表の戦況をながしていた。男の子は戦争ごっこをやっていたので、ムズムズするような感じだった。「カッタ（勝った）カッタの下駄の音」などとはやしたてた。

昭和17年

<シンガポール陥落>

紀元節を目指して占領しようとしていたシンガポールが陥落すると、陥落を祝して全校生徒で旗行列を行った。大太鼓、小太鼓を打ち鳴らして、班別・男女別で手に手に日の丸の小旗を持ち、高等科が先頭で1年生が後尾につき、全町を方面別にまわった。なお、それ以前のお祝いの時は提灯行列をしていた。提灯行列は昭和12年の南京陥落が最後だった。

<試験>

3学期の放課後、われわれ2組の熊本先生は、選考した生徒だけを残して国語と算数の試験をさせ、優等賞を決められた。国民学校となって優等賞は練成賞と変わったが、皆、優等賞優等生といていた。

<食事>

ご飯は黙って食べるのが鉄則だった。家族の中でそれぞれ箸の大きさが異なっていた。

<メザマシ>

朝起きて食べる菓子をメザマシといった。寝る前にも「これを食べたら寝ろ」と言われて菓子を食べた。

<台所>

勝手。板の間で、土間に流しがついていた。古い家では板の間で膝をついて使う流しだった。

<校歌>

11月3日の開校記念日には「うれし うれし 今日の記念日 我が小学の建ち初めし良き日は またも巡り来ぬ……」と校歌を歌った。戦争で次第に歌われなくなり、戦後は新しく校歌が作られた。先生が転任される時は、朝礼で「師を送る歌」を全校生徒で歌って先生を送った。

<先生の呼び方>

小学校の先生を訓導と呼び、中学の先生を教諭と呼んでいた。他に先生という呼び方はお医者さんだけだった。

まとめにかえて

既に報告した聞き取り内容は、子どもの頃の遊びや動植物の名前などを中心としたもので、年代的には昭和12年から小学校に入学した昭和15年までの内容であった。今回の聞き取りは、前回は補足する形で、昭和14年の年末から昭和17年の年末までの学校生活を中心とした内容となっている。いずれも詳細な部分まで記憶されていることに対して大きな驚きであるとともに、記憶が季節感をもって語られることの特徴は前回の報告においても指摘した通りである。しかし、前回の報告と違い、記述方法は年代を順に追っている。これは、話者の記憶は1年の流れの中で展開されているということであり、その点を尊重しながらまとめることにしたためである。したがって、学校生活や年中行事、あるいは歴史的な事象を別々にまとめることをせずに年代ごとに記述した。いくぶん随想的であり、記述方法の是非もあろうが、本事例のように1人の話者から継続的に聞き取りを進めていく中では、話者に合致したスタイルを見つけて行くことも必要ではないかと考えている。

なお、話者の西山敏夫氏には継続的にたいへんお世話になっている。本報告においても内容を監

修していただいた。この場を借りてお礼申し上げます。
(当館学芸員)

【註】

- (1) 平成10年度は、博物館実習を平成10年12月1日～12日に行った(本誌年報11頁参照)。今回の調査に参加した実習生は下記の2名である。報告は実習生から提出された調査表および筆者自身の調査表をまとめたものである。
・栢沼奈佳(東海大学文学部文明学科4年)
・平田直史(桜美林大学経済学部経済学科3年)
- (2) 拙稿「二宮町山西の民俗(1)」『年報—平成8年度—』1997 大磯町郷土資料館
- (3) 旧東海道(現国道1号線)。

- (4) 歌の正式な題名ではない。先生の退職や転任時に歌ったもので、教科書等には載っていなかった。

以下に歌詞を記しておく。

- ①学びの庭の父母と
仰ぎまつりし師の庭の君に
別るる今日の悲しさよ
思えばさめぬ夢に似て
- ②別れて後も御教えは
かたく守りて励ままし
千々の恵みの一つだに
報ゆる道となるまでに

年 報

— 平成10年度 —

◇平成11年12月28日発行

◇編集発行

大磯町郷土資料館

神奈川県中郡大磯町西小磯446-1

TEL 0463-61-4700

◇印刷

(株)カメイ写真